

自動的な学級集団を育成する開発的生徒指導の在り方 — 「クラス会議」の手法と生徒指導の三機能を生かした話し合い活動の工夫 —

府中市立上下南小学校 津田 典和

研究の要約

本研究は、所属校第6学年の児童を対象に、自動的な学級集団を育成する開発的生徒指導の在り方を追究したものである。先行研究から、学級活動において「クラス会議」の手法と生徒指導の三機能を生かした話し合い活動の工夫を行えば、児童一人一人が意欲的に話し合い活動に参画し、学級における生活上の諸問題に対して互いに折り合いを付け、自分たちの力で解決することができる自動的な学級集団が育成されるであろうという仮説を立て研究授業を実施した。事前事後の質問紙調査の結果、自動的な学級集団に必要な4因子（「集団決定」「ルールの内在化」「リレーションの形成」「話す力・聞く力」）の評定平均値は全て有意に上昇した。また、授業後の振り返りシートの記述や行動観察の様子から、折り合いを付けることを実感し、自分たちの力で問題を解決する話し合い活動を行う姿が見られるようになった。このことから、本研究の仮説に係る有効性が示唆された。

キーワード：自動的な学級集団 クラス会議 生徒指導の三機能 話し合い活動

I 問題の所在

1 自動的な学級集団を育成する必要性

中央教育審議会答申（平成20年）において、児童の人間関係の希薄化や生活上の諸問題を話し合って解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になってきていると示され、好ましい人間関係が築けていないことが指摘された。

こうした状況を受け、小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年、以下「解説」とする。）には、「特別活動については、…（略）…、特によりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成を重視する。」¹⁾と示されている。

また、文部科学省（平成23年）は、「子どもたちの話し合いと実践で創り出すよりよい学級・学校生活【小学校版】」において、児童が学校生活の中で直面する身近な問題について熟考しながら、話し合いを重ね、よりよい生活づくりを目指した解決への行動を通して、児童の社会に参画する態度や自治的能力を育成することを目指す「子ども熟議」の取組を推進している。

2 自動的な学級集団とは

福岡市教育センター（平成16年）は、自動的とは自分の所属する集団による民主的な手続きによって

決定した総意に基づき、教師の支援や援助を借りずに活動することであると示している。

河村茂雄（2010）は、自動的な学級集団について、学級のルールが児童に内在化され、児童の活動が温和な雰囲気の中で展開され、学級の問題を自分たちで解決できる集団であると述べている。

一方、富山県総合教育センター（平成19年）は、自動的な活動について、学級の生活上の問題に対して自らの考えを伝え話し合い、集団決定し、問題を解決していくことができる活動であると示している。また、自動的な活動ができるようになるためには、児童相互の信頼関係（リレーション）を基盤とした話し合い活動が必要であると示している。

さらに、「解説」には、よりよい人間関係を築いたり、集団としての意見をまとめたりするための話し合い活動では、「話すこと・聞くことの能力」が実践的に働くと示されている。

これらのことから、自動的な学級集団とは、学級のルールが児童に内在化され、自分が所属する学級の生活上の問題に対して、話し合い活動を通して集団決定し、自分たちの力で問題を解決していくことができる集団であると考える。また、自動的な活動を充実させるためには、児童相互の信頼関係（リレーション）を形成し、児童一人一人がより良い学級にするために自分の考えを分かりやすく伝えたり、相

手の立場に立って、真剣に聞いたりすることができる力を育成する必要があると考える。

そこで本研究は、自治的な学級集団に必要な要素として、話し合い活動で合意形成を図る「集団決定」、学級の約束を全員で守っていく「ルールの内在化」、互いに信頼し合う「リレーションの形成」及び自分の考えを分かりやすく伝えたり、相手の意見を大切に聞いたりする「話す力・聞く力」の4点（4因子）と整理し、研究を進めることとした。

3 所属校第6学年の実態

第6学年の児童（15人）は、6年間同じ学級で生活している。学級内における児童同士の人間関係を概観すると、立場や役割が固定化しており、学級で起きた諸問題の解決に向けた話し合い活動で、積極的に意見を出す児童はいつも2、3人である。その結果、一見集団決定したように見える解決策も、学級全員が納得したものになっていないことが多い。

本年6月に当学年の児童を対象に、「自治的な学級集団に関する意識調査」を実施した結果を表1に示す。

表1 事前調査における肯定的回答の割合（%）

因子	問	質問項目	肯定的回答	
集団決定	1	自分たちで問題を解決していくことが大切だと考えている。	100	70.7
	5	互いの思いを理解して話し合いをしている。	66.7	
	9	互いの意見の良さを比べながら話し合いをしている。	40.0	
	13	話し合いを通して、自分の考えを見直すことがある。	80.0	
	17	学級で話し合いをするとき、自分も良く、学級の人にも良い解決方法を考えている。	66.7	
ルールの内在化	2	人が嫌がることはしないようにしている。	100	81.3
	6	何かをするとき任せにしないで行動している。	86.7	
	10	自分が言ったことに責任をもって行動している。	73.3	
	14	学級のルールを守ることは大切だと考えている。	93.3	
	18	学級のルールを守っていない人に声をかけている。	53.3	
リレーションの形成	3	学級の中で安心して自分の考えを発表している。	46.7	52.0
	7	学級の人が困っているとき声を掛けている。	80.0	
	11	同じ班の人が何かうまくできたとき、那人をほめている。	60.0	
	15	学級の人たち一人一人の良いところを見付けている。	53.3	
	19	学級の人たちから認められている。	20.0	
話す力・聞く力	4	学級で話し合いをするとき、聞く人の反応を見ながら自分の考えを発表している。	40.0	60.0
	8	学級で話し合いをするとき、理由をはっきりさせて自分の考えを発表している。	46.7	
	12	学級で話し合いをするとき自分の考えが相手に伝わるように、発表している。	53.3	
	16	学級で話し合いをするとき、誰の話でも相手の気持ちを考えて真剣に聞いている。	86.7	
	20	学級で話し合いをするとき、互いの意見の違いを理解して聞いている。	73.3	

自治的な学級集団に必要な4因子のうち、「リレーションの形成」因子と「話す力・聞く力」因子について半数近くの児童が否定的な回答をしていた。また、「集団決定」因子に含まれる「自分たちで問題を解決していくことが大切であると考えている」質問項目に対し、全ての児童が肯定的な回答をしているにもかかわらず、「互いの思いを理解して話し合いをしている」「互いの意見の良さを比べながら話し合いをしている」「学級で話し合いをするとき、自分も良く、学級の人にも良い解決方法を考えている」など話し合い活動に関する質問項目には1／3以上の児童が否定的な回答をしており、自治的な話し合い活動が充実していないことが明らかになった。

児童の学校生活の様子や意識調査の結果などから所属校第6学年においても、生活上の諸問題を自分たちで話し合って解決する力が十分身に付いておらず、自治的な学級集団が形成されていないことが推測された。

4 自治的な学級集団を育成する取組

(1) 学級活動における話し合い活動

学級活動（1）における話し合い活動について、「解説」には、学級の生活上の共同の問題を取り上げ、話し合い活動を通して、学級としての意見をまとめ、集団決定する活動であると示されている。また、杉田洋（2009）は、学級の全員が協力して取り組むべき内容を扱い、取り上げる内容を児童が決め、その方法などを話し合い、集団決定する自治的な活動であると述べている。

これらのことから、学級活動（1）における話し合い活動は、児童が主体的に取り上げる内容を選定し、学級の生活上の諸問題に対して、話し合いを通して集団決定する自治的な活動であると考える。

一方、学級活動における話し合い活動の課題について、杉田（2013）は、学級の諸問題を解決しようとするとき意見があまり出ず、結局は、リーダーシップをもつ子の意見に他の子が同意するだけということが繰り返されることが多いと述べている。

そこで、全ての児童が意欲的に話し合い活動に参画できる「クラス会議」の手法を話し合い活動に取り入れることが、自治的な学級集団の育成に効果的であると考える。

(2) 「クラス会議」について

ア 「クラス会議」とは

赤坂真二（2014）は、「クラス会議」とは、児童自ら生活上の諸問題を議題として取り上げ、クラス

全員の民主的な話し合いによる解決行動であり、相手を論破し、言い負かすのではなく、分かり合い、協力し、双方が納得する答えを見付け出す話し合い活動であると述べている。

イ 「クラス会議」の手法とは

「クラス会議」の手法について、赤坂（2014）は次のように述べている。

- ① 児童が輪になって座る。
- ② 発言者を尊重するために、発言者は、目印となるトーキングスティックを手に持つ。
- ③ 児童は、輪番で発言する。
- ④ コンプリメント（相手への賛辞や誉め言葉など）を交換する。
- ⑤ 解決策のアイデアを出し合い、互いの意見の長所に注目する。
- ⑥ 解決策について集団決定をする。

①～⑥の手法を話し合い活動に取り入れていくことで、児童一人一人がより良い雰囲気の中で意欲的に話し合い活動に臨み、自分たちの力で、学級における生活上の諸問題を解決していくことができるようになると考える。

しかし、先行研究から「クラス会議」の課題として、集団決定する際に安易に多数決で決めることが多く、より良い解決策を見出すために、折り合いを付けた集団決定ができにくいことなどが挙げられる。

（3）生徒指導の三機能を生かした話し合い活動

杉田（2013）は、話し合い活動で折り合いを付けるためには、相手の意見を尊重し、少数意見にも配慮しつつ、より良い解決策を見付け出していくことが大切であると述べている。

話し合い活動で互いの意見を尊重させるためには、相手の意見を真剣に聞く方法を指導したり、相手の意見の良さを認め、評価し合ったりさせる「共感的な人間関係を育成する手立て」が効果的であると考える。

また、話し合い活動で少数意見を生かすためには、児童一人一人の考えを短冊に書いて黒板に掲示したり、意見の良さを教師が示したりしながら「自己存在感を与える手立て」を講じ、色々な意見があることや、互いの意見の良さに気付かせることが効果的であると考える。

さらに、「みんなにとっても自分にとっても良い方法」の見付け方を助言しながら、自分の意見を考えさせたり、書かせたりして、発表の仕方を指導し

ながら発表の機会を与えるといった「自己決定の場を与える手立て」を講じることにより、合意形成していくためのプロセスや、折り合いを付けることを段階的に学ぶことが可能になると考える。

これらのことから、話し合い活動に「クラス会議」の手法を取り入れ、生徒指導の三機能（「自己決定の場を与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己存在感を与える」）を生かすことで、互いに折り合いを付け、集団決定ができるようになると考える。その結果、自動的な活動が促され、自動的な学級集団が育成されると考える。

（4）生徒指導の三機能を生かす手立て

本研究では、先行研究を基に、話し合い活動に生かす生徒指導の三機能のそれぞれの手立てについて表2のように整理した。

表2 話合い活動に生徒指導の三機能を生かす手立て

生徒指導の三機能	生徒指導の三機能を生かす手立て
自己決定の場を与える	<ul style="list-style-type: none">・ 考える時間を確保したり、ワークシートを準備したりすることで、自分の意見を決定し、自信をもって発言できるようにする。・ 集団決定する際に、一人一人の児童が発言するため、考える視点を設定し、理由を明確にできるようにする。・ 集団決定した際に合わせて、自己決定の場も設定し、自己実現の喜びを味わわせるようにする。
自己存在感を与える	<ul style="list-style-type: none">・ 授業の中で、児童一人一人に自分の想いや考えを発言する機会を与えるようにする。・ 自分が考えた内容を短冊に書き、黒板に貼らせる。・ 授業の中で、児童の良い発言や頑張っている点を具体的に評価することで、意欲的に話し合い活動に臨み、発言できるようにする。・ 本時を振り返り、児童の良かった点や頑張っていた点をまとめの話や振返りカードで具体的に評価していくようにする。
共感的な人間関係を育成する	<ul style="list-style-type: none">・ 話合い活動の前に、児童同士がお互いに良い点や頑張っている点を紹介し合うことで、受容的な雰囲気をつくるようにする。・ 児童の意見の良さに注目することで、一人一人の意見を大切に聞くようにする。・ 授業の振返りの際、相互評価する時間を確保し、お互いの頑張りを認め合うようにする。

II 研究の目的

本研究は、「クラス会議」の手法と生徒指導の三機能を生かした話合い活動の工夫を通して、自治的な学級集団を育成する開発的生徒指導の在り方を追究することを目的とする。

III 研究の仮説

1 研究の仮説

学級活動において「クラス会議」の手法と生徒指導の三機能を生かした話合い活動の工夫を行えば、児童一人一人が意欲的に話合い活動に参画し、学級における生活上の諸問題に対して互いに折り合いを付け、自分たちの力で解決することができる自治的な学級集団が育成されるであろう。

2 検証の視点・方法

(1) 検証の視点

○ 研究授業により、児童一人一人の自治的な活動が促進し、自治的な学級集団を育成することができたか。

(2) 検証の方法

○ 質問紙による事前調査を行い、自治的な学級集団に係る実態を把握する。
○ 事前調査の結果を踏まえ、クラス会議の手法と生徒指導の三機能を生かした学級活動指導案を作成し、研究授業を行う。
○ 質問紙による事前・事後調査の比較、授業後の振返りシート及び指導者による行動観察を基に、研究授業の効果を分析する。

IV 研究の方法

1 対象

所属校第6学年（15人）

2 質問紙調査

○ 調査日 事前 平成26年6月6日（金）
事後 平成26年7月14日（月）
○ 方法 4段階尺度法

3 研究授業

(1) 実施計画

○ 期間 平成26年6月6日～平成26年7月14日
○ 対象児童 所属校第6学年（15人）
○ 対象授業 特別活動（学級活動）

○ 活動名 「学級の問題をみんなの力で解決しよう」

○ 目標

学級の生活上の問題に対して、互いの意見を尊重しながら、集団決定し、自分たちの力で問題解決していく体験を通して、自治的な学級集団を育成する。

○ 指導計画

時	学習内容	評価規準
事前の活動	<ul style="list-style-type: none">アンケートを実施し、学級の問題を解決するために話合い活動が必要なことを理解する。	<ul style="list-style-type: none">学級の問題を解決していくためには、話合い活動が必要であることを理解している。
第1時	<ul style="list-style-type: none">自分の考えを学級のみんなに「分かりやすく伝えるための話し方」と「相手を大切にする聞き方」を理解する。	<ul style="list-style-type: none">自分の考えを「分かりやすく伝えるための話し方」と「相手を大切にする聞き方」について理解している。自分の考えを分かりやすく伝えようとしている。
第2時	<ul style="list-style-type: none">物事には多様な見方・考え方や肯定的な側面と否定的な側面があることを知り、積極的に肯定的な面に注目していくことを理解する。	<ul style="list-style-type: none">進んで物事の良いところを見ることの大切さを理解している。どんな物にも肯定的な面と否定的な面があることに気付き、生活に生かそうとしている。
帰りの会	<ul style="list-style-type: none">次時に行う話合い活動の流れを理解し、次時の活動に関心をもつ。	<ul style="list-style-type: none">話合い活動の流れと進め方を知り、進んで取り組もうとしている。
放課後	<ul style="list-style-type: none">話合い活動①に向けて、司会者・記録係と話合い活動の進め方について確認し、リハーサルを行う。	<ul style="list-style-type: none">話合い活動の効率的な進め方について、理解している。
第3時	<ul style="list-style-type: none">男女が協力して取り組む体育館で行うスポーツレクの内容について考え、互いの意見の良さを生かし、集団決定する。	<ul style="list-style-type: none">より良い学級にするために、互いの意見の良さを生かしながら、話合いをしている。学級の問題に关心をもち、他の児童と協力して自主的に話合いをしている。
帰りの会	<ul style="list-style-type: none">活動を通して、自分自身の行動について振返りと自己評価を行う。	<ul style="list-style-type: none">学級で話し合って決めたことを協力して実践している。
放課後	<ul style="list-style-type: none">話合い活動②に向けて、司会者・記録係と話合い活動の進め方について確認し、リハーサルを行う。	<ul style="list-style-type: none">話合い活動の効率的な進め方について、理解している。
第4時	<ul style="list-style-type: none">廊下を走らないようにするために、6年生から全校児童へ提案する取組について考え、互いの意見の良さを生かし、集団決定する。	<ul style="list-style-type: none">より良い学級にするために、互いの意見の良さを生かしながら、話合いをしている。学級の問題に关心をもち、他の児童と協力して自主的に話合いをしている。
帰りの会	<ul style="list-style-type: none">活動を通して、自分自身の行動について振返りと自己評価を行う。	<ul style="list-style-type: none">学級で話し合って決めたことを協力して実践している。

事後 活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単元全体の振り返りを行い、事後アンケートを実施する。 ・ 自分たちの力で話合いを進め、問題を解決することの大切さについて理解している。
----------	--

(2) 生徒指導の三機能を生かした学習指導案の作成

第6学年学級活動指導案を作成し、指導上の留意点に「生徒指導の三機能」を生かす手立てを記入する。表3に第3時の学習指導案を示す。

表3 生徒指導の三機能を生かした学習指導案

	学習活動	生徒指導の三機能を生かす手立て
導入	1 輪になって座る。 2 前時までの振り返りを行う。 3 話合い活動の進め方を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 前時の活動で良かった点を紹介することで、本時の活動への意欲付ける。【自己存在感を与える】【共感的人間関係を育成する】
展開	4 話合い活動をする。 (1)あいさつ (役割の紹介) (2)議題の確認 (3)話合いの準備 (4)質問タイム (5)集団決定 (6)先生の話 (7)あいさつ	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 司会アドバイスカードを参考にして、自信をもって進行ができるようにさせる。【自己存在感を与える】 ◆ より良い内容を選ぶ際に、視点を与えて考えさせる。【自己決定の場を与える】 ◆ 全員に発言する機会を与え、互いの意見の良いところを意識して聞かせる。【自己存在感を与える】【共感的人間関係を育成する】 ◆ 学級で決まったことを基に、自分自身がどのように実践していくかを考えさせる。【自己決定の場を与える】 ◆ 指導者は、話合い活動で良かった点について具体的に評価する。【共感的人間関係を育成する】
まとめ	5 学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 振返りの観点を絞り、自己評価、相互評価することで、自分や友達の良さを認められるようにする。【自己存在感を与える】【共感的人間関係を育成する】

(3) 研究授業の工夫点

話合い活動において、折り合いを付けながら集団決定ができるようにするために、次の3点について工夫を行った。

- ① 話し合うためのスキルや態度を身に付けるために、「分かりやすく伝えるための話し方」「相手を大切にする聞き方」について学習し、互いを大切にし、発言が苦手な児童も自信をもって発言できるようにした。
- ② 発言者の偏りを防ぎ、発言者を尊重する態度

を育てるために、一人一人が発言する際に手にもつ「トーキングスティック」を活用した話合い活動を行った。

③ 集団決定させる際、表4の「納得シート」を黒板に掲示し、折り合いの付け方について説明を行った。

このことで、自分でなく、学級のみんなが納得できる意見を考え出し、合意形成及び集団決定ができるようにした。

表4 納得シート

①	意見を比べる。
②	少し譲って、相手の意見を取り入れる。
③	意見の良いところを合わせる。
④	条件付きで賛成する。
⑤	意見の良いところを取り出し、新しい考えを生み出す。

V 研究の結果と考察

1 研究授業の実際

(1) 第1時

ア 学習の展開

第1時は、話合い活動の充実に向け、「自分の考えを分かりやすく伝えるための話し方」や「相手を大切にする聞き方」について理解させることをねらいとした。

指導者が児童役を演じ、話合い活動で良くない話し方や聞き方をしている場面のロールプレイを行った。児童に話し方・聞き方の良くない点に気付かせた後、良い話し方や聞き方について一人一人に考えさせ、発表させた。最後に、学級全員で取り組むことができる「相手に分かりやすく伝えるための話し方」と「相手を大切にする聞き方」について、それぞれ合言葉を話合いによって決めさせ、学級全体で共有化させた。

イ 児童の様子

授業後に実施した振り返りシートの記述内容の主なものを次に示す。

- ・ 分かりやすく伝える「話し方」と相手を大切にする「聞き方」が分かったので、これからは、話合いの時に人の話をしっかりと聞いて意見をたくさん言いたいです。
- ・ 発表するのが苦手だけど、学級で決めた合言葉を意識して自分の意見を言いたいと思います。

授業後の振返りシートの記述

実際に、ロールプレイを行い考えさせたことや、

「分かりやすく伝えるための話し方」「相手を大切にする聞き方」に関する合言葉を決める活動を行ったことで、自分の考えを相手に分かりやすく伝えるためには、どのような話し方をすればよいか気付いた児童や、学習した話し方や聞き方を今後の話合い活動に生かそうとする意欲的な児童がいることが分かった。

(2) 第2時

ア 学習の展開

第2時は、物事には、色々な見方があることを知り、良いところを進んで見付けていこうとする態度を育てることをねらいとした。

4種類の動物の絵から、もし一日だけなれるとしたらどの動物になりたいかを考えさせ、その動物を選んだ理由と選ばなかった理由をワークシートに書かせ、一人ずつ発表させた。その後、動物ごとに選んだ理由と選ばなかった理由を板書で整理し、どの動物にも良いところとそうではないところがあることに気付かせ、物事には多様な見方や考え方があることを理解させた。

イ 児童の様子

授業後に実施した振返りシートの記述内容の主なものを次に示す。

- ・ 良くないところばかりを見て、いやな気持ちになるのではなく、良いところに注目して話し合いをしていきたいです。
- ・ 物事の良いところに注目することが大切であることが分かったので、話し合いに生かしていきたいです。

授業後の振返りシート

学習を通して、物事には、人によって良いと感じることもあるれば、良くないと感じることもあり、色々な見方や考え方があることに気付かせることができた。

また、人の意見の良いところに注目して話し合い活動を進めていこうとする態度の育成にもつなげることができた。

(3) 第3時・第4時

ア 学習の展開

第3時・第4時は、学級における生活上の諸問題について話し合い、互いの意見の良さを生かしながら集団決定を行うことができるようになることをねらいとした。

話し合い活動において、議題に対する自分の考えを短冊に書かせ、全員の意見を黒板に掲示した。

そして、出された意見の中から集団決定する際

に、考える時間を十分に確保して、みんなにとっても自分にとっても良い意見を一人一人に考えさせ、全員に発言する機会を与えることで、話し合い活動に参加しているという自覚をもたせた。

その後、出された意見の中から、「納得シート」を活用して、折り合いを受けた意見を考えさせ、合意形成させた。

最後に指導者が、折り合いを付けるために相手の意見を認めたり、受け入れたりした児童の発言について賞賛したり、振返りの際に、児童の発言内容や話し合う態度について良かった点を相互評価せたりした。

イ 児童の様子

第3時・第4時の授業後に実施した振返りシートの記述内容の主なものを次に示す。

- ・ 二つの意見をつなげたり、良いところを合わせたりすると、学級にとってより良い解決策になることが分かったので、これからやっていきたいです。
- ・ 多数決で決めないで、みんなが納得した話し合いでの決め事ができたのでよかったです。

授業後の振返りシート

「納得シート」を活用することで、折り合いの付け方を理解し、互いの意見の良さを生かしながら、学級全体が納得できる意見を出し合うことができ、合意形成が図られ、集団決定する力が高まった。

また、事後活動の様子から、集団決定したことにより声を掛け合いながら、意欲的に取り組むことができていることが分かった。

2 質問紙調査の結果と考察

(1) 各因子の評定平均値の結果

事前、事後調査の因子ごとの評定平均値の結果を図1に示す。t検定の結果、各因子の評定平均値は全て有意に上昇した。

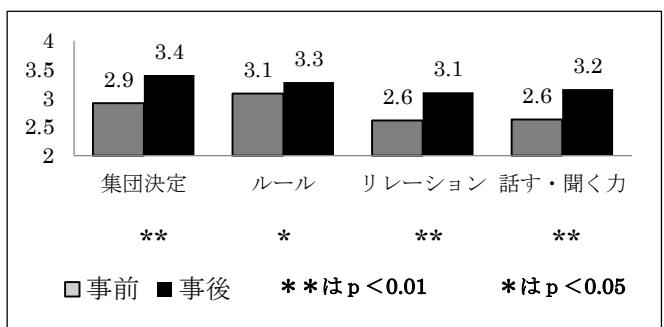


図1 質問紙調査における各因子の評定平均値

(2) 因子ごとの結果と考察

ア 集団決定

図2に「集団決定」因子に係る質問項目別評定平均値の結果を示す。

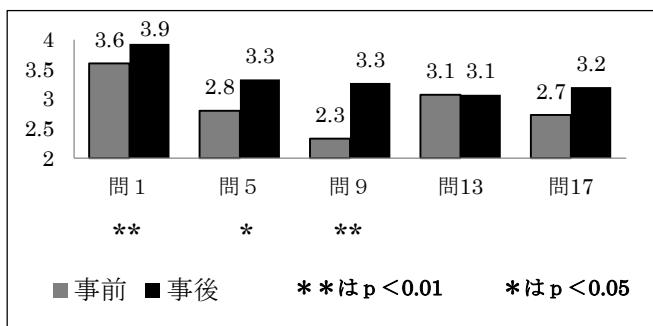


図2 「集団決定」因子に係る質問項目別評定平均値

事前から事後にかけて問13以外の質問項目は上昇し、問1、問5、問9については有意に上昇した。

これらの要因として、まず、児童一人一人に意見を出す場を与える、互いの意見の長所に注目させるというクラス会議の手法が効果的であったと考える。第3時、第4時の話合い活動の様子を見ると、少数意見を尊重したり、良い考えを探したりする姿勢をもった話合い活動が増えた。さらに、出された意見を短冊に書き、黒板に掲示するといった「自己存在感を与える手立て」や、折り合いを付けるための方法を具体的に提示し、しっかりと時間をとて「みんなにとって自分にとっても良い方法」を考えさせる「自己決定の場を与える手立て」を講じたことで、自分たちで意見をまとめたり、決めたりする集団決定の良さを実感できたためと考える。

イ ルールの内在化

図3に「ルールの内在化」因子に係る質問項目別評定平均値の結果を示す。

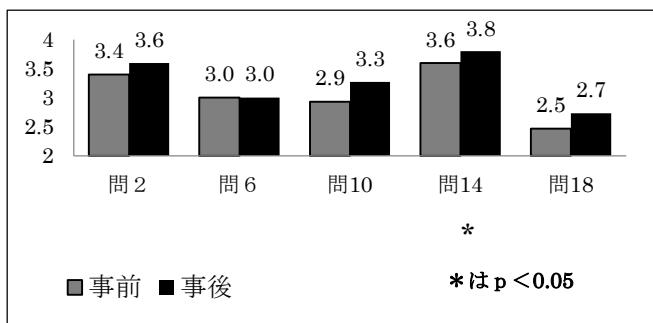


図3 「ルールの内在化」因子に係る質問項目別評定平均値

事前から事後にかけて問6以外の質問項目は上昇し、問14については有意に上昇した。

これらの要因として、クラス会議の手法であるトーキングスティックを持っている人の発言を尊重することや、輪番で発言するといった話し合いの手順やルールを児童一人一人に理解、確認させ話し合い活動を行ったからであると考える。また、発言者の方を向いて聞かせるといった「共感的人間関係を育成する手立て」を講じたことで、発言者の偏りがなくなり、互いの意見を真剣に聞く児童も増えた。さらに、集団決定した後、決定したことに対して、自分自身がこれからどのように取り組んでいくのかといった「自己決定」をさせたことで、集団決定したことに対する全ての児童が責任をもって行動していた。問14の質問項目で否定的な回答をしていた児童も活動後の振り返りシートに「自分たちでルールを決めたから楽しかった。」と記述しており、多くの児童が自分たちでルールを決めることの良さを実感できたと考える。

ウ リレーションの形成

図4に「リレーションの形成」因子に係る質問項目別評定平均値の結果を示す。

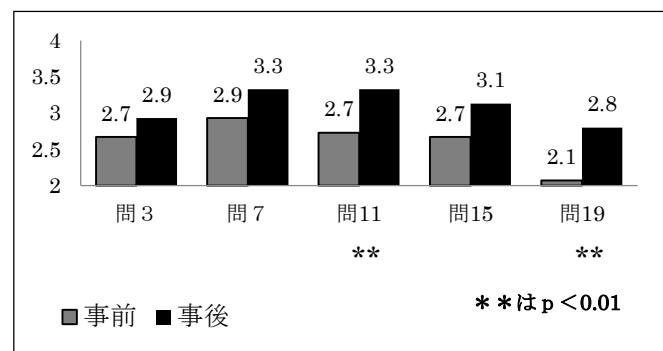


図4 「リレーションの形成」因子に係る質問項目別評定平均値

事前から事後にかけて全ての質問項目が上昇し、問11、問19は有意に上昇した。

これらの要因として、児童間の距離が近く、全員の顔を見る事ができる車座になって座り、互いの意見の良いところを交流させるクラス会議の手法が効果的であったと考える。また、先述した相手の意見を真剣に聞かせたり、少数意見にも十分耳を傾けたりといった「共感的人間関係を育成する手立て」を講じたことで、一人一人の良さや頑張りを共有し合い、認め合うことにつながったためと考える。

エ 話す力・聞く力

図5に「話す力・聞く力」因子に係る質問項目別評定平均値の結果を示す。

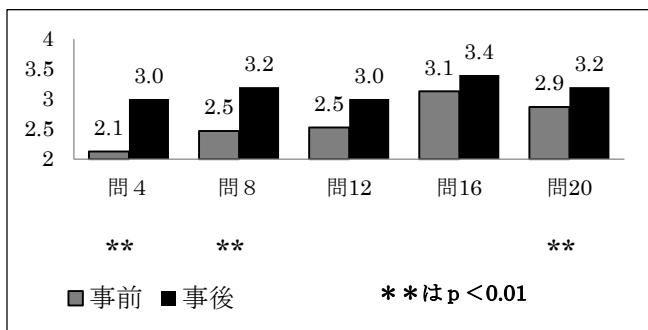


図5 「話す力・聞く力」因子に係る質問項目別評定平均値

事前から事後にかけて全ての質問項目が上昇し、問4, 問8, 問20の質問項目は有意に上昇した。

これらの要因として「分かりやすく伝えるための話し方」と「相手を大切にする聞き方」について、話し合いを通して自分たちでできる方法を見付けさせ、その後、合言葉でまとめさせ、教室に掲示したことが効果的であったと考える。そして、自分の意見をしっかりと考え、まとめる時間を確保するといった「自己決定の場を与える手立て」を講じたことで、常に話し方・聞き方を意識、確認することができ、自分の意見を自分の言葉で発表し、それを真剣に聞いてくれる話し合いの良さが実感できたためと考える。

その結果、これまでの話し合い活動では、意見を出すことが少なかった児童が、積極的に発言したり、事前調査で「話す力」に否定的な回答をしていた児童が、「次回の話し合い活動が楽しみだ。」と記述したりしていた。

(3) 行動観察の結果と考察

研究授業後の児童の姿を次に示す。

- ・ 話合い活動でどの児童からも意見が多く出されるようになった。
- ・ 自分のことだけでなく、学級全体のことも考えた意見が出るようになった。
- ・ これまで話合い活動に消去的であった児童が、自ら司会にチャレンジしたいと立候補するようになった。
- ・ 普段の生活から、相手に分かりやすく伝えるために学級で決めた約束を意識して発表することができるようになった。
- ・ 集団決定後の実践活動に意欲的に取り組む児童が増えた。
- ・ 集団決定したことに対して、互いに声掛けをしながらみんなでやっていこうとする姿が見られるようになった。

行動観察による児童の姿

行動観察から、クラス会議の手法を取り入れ、生徒指導の三機能を生かした話し合い活動により、互いの考え方の違いや共通点をはっきりさせながら、自分

たちの力でより良い考えを見付け出す自治的な話し合い活動ができる学級集団になってきていることが窺える。また、自分の意見を自分の言葉で発言できるようになり、自分のことだけでなくみんなのことを考えて意見を出す児童が増加した。自分たちの力で合意形成を図り、集団決定できることは、児童の自信へつながり、自分たちの問題は自分たちで解決したり、集団決定したことは一人一人の児童が責任をもって実践したりすることにつながると考える。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- クラス会議の手法に生徒指導の三機能を生かした話し合い活動の工夫を取り入れることは、学級における生活上の諸問題に対して、児童一人一人が意欲的に話し合い活動に参画し、合意形成及び集団決定させることができ、自治的な学級集団を育成する上で有効であることが明らかになった。
- 学級における生活上の諸問題の解決に向けて、少数意見を尊重し、折り合いを付けながら自分たちでより良い方法を考えるために、「効果的な話し方・聞き方」の指導及び折り合いの付け方を示した「納得シート」の活用は、有効であることが明らかになった。

2 今後の課題

- 本研究の効果が、学級における生活上の諸問題の解決に向け、学級活動以外の場面でどのように生かされているか検証する必要がある。
- 自治的な学級集団の育成と生徒指導上の諸問題との関連、さらには一人一人の学力の向上との関連について明らかにする必要がある。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説特別活動編』東洋館出版社 p. 115

【参考文献】

- 河村茂雄（2010）：『日本の学級集団と学級経営』図書文化社
 杉田洋（2013）：『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術』小学館
 赤坂真二（2014）：『赤坂版「クラス会議」完全マニュアル 人とつながって生きる子どもを育てる』ほんの森出版
 広島県教育センター（平成23年）：「自ら学ぶ意欲を育む生徒指導の在り方に関する研究 ー生徒指導の三機能を生かした学習指導法の開発と評価を通してー」